

未来社会の仏教と私

真言宗豊山派僧侶 品田裕淳

私たちは、今日ほど世界が予想しがたい速度でうねりをもって動いていることの実感を抱いたことはかつてなかったのではなからうか。

それは、昨年に始まった東欧諸国での変革、東西両ドイツの統合、ソ連とアメリカを中心とした冷戦構造の解消、イラク対全世界の対立等である。

また、二十一世紀を目前に控え、全地球的（グローバルな）視野に立った環境問題が声高に叫

ばれている。いわば、生存の危機的状況を認識し始めてきたのである。ある学者によれば、このような脱イデオロギー社会において、最終的にリベリズムに対立するものとして残るのは、宗教とナショナリズムであるといわれている。二つとも心の領域の問題であるが、しかし宗教にはややもすればドグマ性が強いので、ナショナリズムよりも対立解消という点では困難ではないかと私は思う。

いままでの人類の歴史を眺めてみた場合、そこにはいつも宗教に端を発した対立があった。

宗教は排他的であり、世界の宗教はそれぞれ自分の宗教こそ究極の真理を説いていると主張してきた。ところが、二十世紀の今日世界を最終的に制覇する宗教はありえないことが明らかになってきた。すでに多くの人々は、宗教の本質はドグマに他ならないことに気がつき始めている。このことは、一九八六年にアッシジでローマ法王ヨハネ・パウロ二世の主唱によって実現された世界平和の祈りに示されているし、わが国の禅僧とカソリックの修道士によってもたれた「東西靈性交流」によっても



明らかである。このような意味で、二十一世紀は宗教史上、類を見ない画期的な時代であるといえよう。

おそらく来世紀には、紆余曲折を経ながらもドグマなき宗教の時代、つまり宗教の相違によって人間がわけへだてされることのない時代を迎えるであろうと思われる。人類にとっての進歩とは、ドグマから自由になることであると私は考えたい。

さて次にはここでのテーマである「未来社会の仏教」ということに視点を移そう。周知のごとく、最近のマスコミにおいては脳死問題や、ターミナルケアが盛んに取りあげられ、そこで仏教者の発言や取り組む姿勢に期待がもたれている。

一方現代の仏教は葬式仏教であるという批判もしばしば聞かれる。釋尊は「生老病死」の四つを人生の苦の根本的なものとして取りあげら

れたが、前述の脳死問題にしてもターミナルケアにしても、ただ単に「死」にのみ焦点が当てられ、他の「生老病」と切り離され、特別視されすぎていくような気がしてならない。あくまでも、「生老病死」は総体として把握されるべきである。このように、各々別個のものとして考えられるようになった原因は、いったいどこにあるのであろうか。おそらく、日本仏教のセクト主義・ドグマ主義によるものと思われる。

歴史に名を刻した各宗の宗祖や高僧方の多くは、自分の宗派だけでなく、他の宗派の本山でも修行を積まれ、研鑽にいそしまれた。それに対して、今日僧侶になるためには各宗立の大学に進むのが確実だと多くの人々は言う。とうぜんのこと一つの宗派を自分で選択することになる。それはかつての祖師方に比すると閉鎖的になることである。かつまた、現在の宗教系大学には知識としての仏教、学問としての仏教があ

るだけである。

また大学によつては卒業と同時に僧侶の資格が与えられるという。合宿免許を取資が与えられるという。合宿免許を取得するのにかよっている。このようにいう私も、一応仏教を学んだが、何か物足りないような気がしてならない。

仏教では仏法僧を「三宝」と称し、重要視している。ここでいう「僧」とは、本来「仏法を信じて仏道を行う人々の集団(僧^{そうぎや}法)

を指す。したがって本来の僧侶と世間一般で認識されている僧(いわゆる「死者儀礼」を生業としている職業僧侶)の間には、かなりの隔りがあることは否定できない。出家者として法衣をまとい、頭を剃っている、いわゆる形を整えた姿はあるが、果たして心のほう(心の出家)はどうであろうか。今こそ、我々仏教者一人びとりに、あらためて僧侶としての在り方が問われているのであり、さらには「僧^{そうぎや}法」本来の共同体的な

在り方というものが今後見直されるべきである。我々が今こうして生きているということは、存在しているということでもある。

冒頭にも述べたように、我々人類は文明の岐路に立たされている。これからは宗教や科学技術をはじめ各領域の知的遺産ともいべき諸分野の学問・哲学・思想などに携わる人々にお互いに手を結び協力して行くべきであろう。

わが仏教も特別な枠をはめずに、あくまでも人間の思索の営みの一環として共有されるのが望ましい。それはまた、仏教以外の諸宗教に関しても同様である。

最後になるが「あなたにとっての仏教とは何か」を問われた場合、実際私は答えに窮する。

私は大学に入ってから得度し、仏教を志したが、ある人から「坊さんになったということとは、それ自体、人生の目標というか答えのようなのがお与えられているのだ」といわれたことがあ

る。確かにその通りかもしれない。

しかし、私の道はまだまだ険しい。私は時として、自分の選んだ道はこれでよかったのかと思うことがある。私のようなものが僧侶にふさわしいのかという疑念に駆られることもある。

祖師方の行履あんりに還ることこそ、現在のそして本来の私に対する何らかの指針を与えてくれるであろう。さらに仏陀の生き方を真似まなぶことが出来たら「僧侶になったことの意義」がおのずから明らかになるであろう。

もつとも、それ以前の問題として、まづ自分の人間性を高めることが先決であると、私は考えている。